

# HeliosTrope

三次空地

「アタシ、ほんとは赤毛なの」

彼女は長い金髪を掻きあげた。言葉が白い流れになって夜気と混ざり合う。僕の唇から抜けていく煙が、ゆらゆらと陰になって逃げていった。

ソーダ水を溢した星空の下で、風の吼える声と彼女の乗ったブランコの軋みがお互いの尻尾を追いかけあっていた。不気味にさんざめく木立は昼間の喧騒をまねた亡霊たちの声。

「だからアタシ、自信がなくて。ねえ、男の人にはそんなことわかりっこないと思うけど」

「ありふれててつままないものに憧れるところはね」

マスカラは涙で剥げちゃって何だか滑稽。だけど肌を沢山の油と色で塗りこめたって、目の色までは変えられない。心の奥に繋がってるから。

「でも、赤毛の女の子は好きだよ」

彼女は僕をバカにしたように鼻で笑ってから、少しだけ泣きそうな目をした。

「いいの。慰めないで。余計に惨めじゃない」

「慰めたわけじゃない」

「……可哀想だって思ったんでしょ、アタシのこと」

「可愛い子がいたからナンパしてみたただだよ」

口紅の剥げた唇が弱弱しく微笑った。

「アンタって優しいのね」

彼女はブランコを緩く漕いだ。僕はちびた煙草を地面に落として靴の先で踏みにじる。

「あの人が言ったのよ、『僕たちどこに行くのも一緒だ』って。嘘だったの、全部。きつとはじまりから！」

「彼が嫌い？」

「そうね、嫌い。とてもね」

鎖を握り締める彼女の指はひどく頼りない。彼女の掌に力を込めさせているのは怒りなんかじゃないってこと、僕は知ってる。

「だから、殺したんだ」

彼女は真っ直ぐな視線を僕に向けて、やがて緩緩と瞼を伏せた。

「よくわからないの。本当はね」

一緒に住んでた男を殺してしまったんだっていう。

隣にいたのは生まれつき金髪で、ブルーの瞳で、少し頭の弱い女の子。知らないわけじゃない、だってその子は自分の妹。

キッチンにあったナイフを握り締めたとき、どんな気持ちだったのかなんて彼女にしかわからない。わからないけど、だからって彼女が悪いだなんて僕にはいえない。血に汚れてる自分の手を見ながら、彼女は震えてた。叫びかたも忘れて。

「悪いことをしちゃったんだわ」

彼女は自分の腕で自分の胸を抱いた。暖かなはずのコートも、彼女の震えを取り去ってはくれない。針の欠けたブローチ。お気に入りの洋服。すべて心を凍えさせてしまうんだから。僕は名前も知らない恋人を抱きしめる。

「君は僕の好きな匂いがする」

チェリーパイみたいに甘酸っぱい匂い。記憶の中でいつも微かに香ってる、あの子によく似た。

「ヘリオトロープって花なの」

女の人の身体って壊れそうなくせに、その実すごくしなやかで。こんな風にされるために出来てるような気がする。でも、回される腕が誰のものかなんて関係ない。大切な事だって思い込んでるだけだ。鼻腔に流れ込んだ脂粉の甘ったるさが劣情を掻き乱してくるから、バランスを失って揺れたブランコのせいにしてキスをした。

人が孤独を語るときはいつも鹿爪らしい顔して難しい言葉を並べるけど、本当に寂しいときは一瞬の渴望を癒すことができたならそれでいいんだ。僕はそういう風にして生きてきた。僕のどうしようもない欲望に応じてる彼女だって、きっと。

愛なんて神様の作ったトラップだから、貪り尽くしたらどこかに消えてしまう。はじめからなかったみたいに。そんなこと失う前からわかってるのに。

湿った吐息を絡めあったあとの空気は、深く透明に冴えていた。

僕の母親は愛を売る仕事をしていた。

ウェーブのかかった髪と宇宙みたいに黒い眼をして、夜毎違う男を連れている。彼女は金を受け取るけれど、男たちは何も手にしていない。幼い僕には理解が出来なかった。それを訊いたら「ベイビー、大人になればわかるわよ」って赤い唇が囁いた。

いつだったかの秋の朝、ベッドで死んでいた。アスピリンを飲みすぎたせいだろう。僕は部屋中の洋服や宝石をかき集めて売り払った。大した金にはならなかった。全部紛い物だったから。僕が子供だったからかもしれない。

十六回目の春の夜、僕は愛を買った。一番安い紙幣が五枚と二杯の強いカクテルで。つまらなそうに寝そべる女の背中と仕立ての悪いベッドの軋み。愛っていうのはやけに水っぽいくせに、頭をクラクラさせる。

二十二歳の夏の昼、バスルームで夢を見てた。

空のバスタブで目を覚ました僕は一緒にいたヤツに騙されたことを知った。残されたのはビニールパンツと藍色のシャツ。綿ぼこりにまみれた帽子。トランク一杯の金は跡形もなく消え去った。

そんなことにはもう慣れっこだった。

ボーイの目を掻い潜ってホテルを出ると、メインストリートは人の海。子供たちがわけもわからずはしゃいでる。大人たちの掲げるプラカード、紙ふぶきと軽快な音楽。ドレス姿の女の人が、屋根のない車からニコニコ笑って手を振ってる。その横の偉そうなオッサンも、脂ぎった顔に精一杯の愛想笑いを浮かべていた。

僕の目の前で白いドレスが真っ赤に染まった。射的の景品みたいにコトンと倒れてく。人の流れはぐちゃぐちゃに掻き回され、トランペットの残響が沢山の悲鳴に飲み込まれていった。

それからずっと歩いていくと、人気のない汚れた街に辿りついた。僕は自嘲的に鼻を鳴らした。一時は小綺麗な姿をして上等な生活ができて、戻ってくるのは結局こんな場所だ。

僕の薄汚れた感性には汚れた場所がよく似合う。僕を騙したヤツもいつか気がつくだろう。早かったか、遅いかの違いだ。

目の前にそこらじゅうボコボコの黒い車が止まった。

「あんた、浮かない顔をしてるね」

両腕が刺青だらけの男が窓から顔を出して、僕に話し掛ける。僕は肩をすくめた。

「無一文なんだよ」

「じゃあその帽子をくれよ、一晚奢ってやるぜ」

後ろに座ってたもじゃもじゃ頭の男が、僕の帽子をひょいと奪った。そしてすかさず僕を車の中に引き込む。

「あんたが誰だか知らないけど、今夜はとにかくパーティーしたい気分なのさ！」

もじゃもじゃの頭から変な臭いがする。僕が怪訝な顔をしていたら、二週間洗ってないって、彼は犬みたいな顔をくしゃくしゃにして自慢げにいった。

「愛と平和の象徴だよ」

スパゲッティヘア、最近流行だっていうけど。

真っ赤に塗りたくった傾斜のキツイ階段を転げるように下りた先にある店の名前は“Voodoo Club”、スパゲッティヘアが蝙蝠のエンブレムのついたドアを蹴り開けた。

毒々しい紫の照明に沢山の憂鬱な顔が照らされてる。目の落ち窪んだバニーガール、疲れたキャットウォークでドリンクを運んでる。セブンアップとミルクとオレンジジュース。

刺青男が天井のライトを指差してこういった。

「いいか、アイツがオレンジになったら踊らなくちゃいけないんだ。誰よりもイカれたステップで」

スパゲッティヘアがステージに駆け上がってギターを手にした。

フロア全体がザラザラした音色とオレンジ色で満たされる。壊れそうな声とキレたドラムがミキサーの刃みたいになって空気をメチャメチャにする。さっきまで死んでた奴ら、フロアが波打つくらい飛び跳ねる。屈強な男がジョッキに入ったミルクセーキをブチまけた瞬間、鈴の音が僕の心を貫いた。

スカートから見え隠れするストッキングのほつれ、テーブルの上で激しいステップを踏む色のあせた黒いエナメル。彼女のタンバリンは熟れ過ぎた苺の赤色で、髪の毛も同じ色をしてた。うねるリズムに乗って腰と肘とで撃ち鳴らす音が、光になって零れてる。ツンと尖った鼻、少し上を向いた薄い唇、ソバカスの浮いた頬。夕焼け色に照らされる、不機嫌な黒猫みたいな横顔に見惚れてた。そんなに美人じゃなかったけど。

突然、投げ捨てられたギターの残響が天井で砕け散る。

「逃げろ！」

拳銃を持った制服警官が押し寄せてきて、客は我先に逃げ出した。刺青男が手錠を嵌められるところを見た。僕を見てニヤリと笑う。スパゲッティヘアの喚き声を背に、僕は店を後にした。

「お前らなんかに渡すもんか！ オレはこのクソみたいな街を愛してるんだッ！」

彼らが狙っていたのは白いドレスの貴婦人じゃない。その隣に座っていた、脂でパンパンの

男だった。新しい市長だ。でも、そんなことは僕に関係ない。誰が死んだって、この街がどうなったって。どうせすぐ出ていってしまうから。

ざわめく街の中、僕はクラブで見かけた彼女を探してた。

紛い物の宝石と、穴の開いたストッキング。生きるためなら身を売ることすら厭わない女だ、と男たちは嘲笑った。頭の痛くなる安酒を啜っては世の中に対する不満をブチまける自分の姿を見れば、そんなこといえるはずもないのに。こんな出来損ないの地獄みたいな街に生まれてしまったのは自分のせいではないけれど、心まで泥にまみれているのは誰かのせいじゃない。

錆び付いたバリケード沿いを歩く彼女をみつけた。名前はシルベット。僕は彼女の進行方向に回りこみ、包装を剥きかけたロリポップを差し出す。

「やあ」

自然光の下で見る彼女はずっと幼く見えた。

それもそのはず、まだ十六だ。それを可哀相なんて思うやつはいないだろう。もっと幼い頃から汚い世界を覗き込んでるヤツなんかゴロゴロいる。

「私をバカにしてるの？」

「ストロベリー味は嫌いだったかな」

「そうじゃなくて――」

「昨日、クラブで君を見かけたんだ。少し話がしたくて。迷惑？」

「変な人ね」

まんざらでもなさそうに笑った。

「ただでとはいわないさ。君をディナーに招待するよ。――出来うる限り高級な」

僕はポケットから革の財布を取り出してみせる。どこで調達してきたか訊くのは野暮だ。誰かが笑っている時は誰かが泣いている。

見た目の割りに中身はお粗末だった。焼印のブランドネームが煤けて見えた。財布を覗き込んだシルベットはツンとすました表情を作る。

「あら、私は構わなくてよ。たまにはいいじゃないの、最下層の食事っていうのも。最高級ディナーには飽きてたところよ」

そういうわけで、僕らはカピタ匂いのするサンドイッチを分け合った。それから、冷えてないコーラを一本。

僕は昨晚クラブに行くことになった経緯を話した。シルベットはあの二人とは知った仲だったようだ。悪くはないけど馬鹿なヤツなのよね、と少し寂しそうに笑った。僕も彼女も、彼らと会うことはないだろう。もう二度と。

「酔った勢いで市長を殺す話をしていたのは知ってたけど、本当にやるとは思わなかったわ」

「でもどうして？」

「この汚れた土地を埋め立てて、綺麗なビルを建てるとっていったのよ」

「そうすれば街が清潔で健康的になるってわけか」

「そうね。あの人たちは私たちが性質の悪いウイルスか何かだと思ってるの。触れば自分たちも感染するってね。――ただ貧しくて、そのせいで心が病んでるだけなのに」

ああ、彼らはそれが怖いんだ。

病気なのは貧しさのせいじゃないって認めたら、自分の存在意義がわからなくなる。僕は世界の間隙に暮らして、様々な人間の言葉を拾い聴きしてた。だから知ってる。そういう人間はこの汚れた土地にも、あの綺麗な街にも沢山いる。自らの病み衰えた姿を直視できないから、連中は血眼で貶める対象を探してる。

「市長はこの土地を見下して、この土地の連中は君に唾を吐く。――それで君は何を憎むの？」

「何も」

「本当に？」

「ええ。私は自分のことを可哀相だなんて思わないもの。ただ、悲しいだけよ」

「悲しい？」

「私を買う人はみんな私に施してやってると思ってるわ。だけど、本当にそうなの？ 私に施しを与えて確かめなきゃいけないくらい、プライドが擦り切れてるともいえるわよ。そんな人たちが私より幸せだとは思えない」

「君は幸せなの？」

「――少なくとも、不幸じゃないってだけ」

サンドイッチにかぶりついたら、大量に入っていたマスタードに噎せた。シルベットは僕にコーラの瓶を差し出す。

「貧乏人って、まったくお可哀相ね。一日中駆け回ってこんなモノしか食べられないんだもの」

僕たちは顔を見合わせてクスクス笑った。

どんなに悲しいジョークでだって笑わなきゃいけない人間もいる。僕や彼女やあのクラブにいた連中には、嘆き悲しむ時間なんてこれっぽっちもない。涙を流しそうになったら最後、この世界から消える羽目になる。自らの手で。

「あなたはどこから来たの？」

「覚えてないよ」

「じゃあ、どこへ行くの？」

「行き先もない」

「ついて行ってもいい？」

「どうして？」

「ここには居たくないの」

断る理由なんてなかった。

どうせ僕たちがここで一緒にいることには意味がないから、僕たちがいつかバラバラになってしまうことにも意味がない。僕が彼女に惹かれているのも、彼女が僕に興味を持ったのも。何も。

バスケットケースにメロンソーダとホットドッグを詰め込んで、僕たちは旅に出た。誰かが置き去りにした水色の車で。バックシートに血が染み付いていたけど、そんなことで気が滅入るほど僕らは綺麗な心を持ちじゃない。

ヒマワリの咲く丘で、シルベットは小さな本を取り出した。彼女は字が読めなかったから、僕に読んで欲しいと本を寄越す。ページのぐるりは黄色く焼けていた。詩が書かれている。

「きっとこの本には、大事な事が書いてあるの」

僕のたどたどしい朗読に耳を傾けるシルベットは、時々風の中に消えてしまいそうだった。不安になってそっと腕に触れる。滑らかな肌と、確かな温もり。

「ライラックってどんな花？」

「ニインチくらいで赤くて、なんか地味で、そんなに人気はないんじゃないかな。でもこの人はこの花が大好きなんだよ」

シルベットが微笑む。僕が適当なことをいっているのはわかっていただろう。花のことなんか良く知らない。だけど確かなことを求めているわけじゃない。詩人が両腕に抱えた真っ赤な花を思い浮かべてる。一緒に。

僕たちは語り合うほどの思い出を持ち合わせてなかった。草の海に沈みこんで、溶けていく雲を眺めていた。晴れ渡ることを知らない、薄曇りの青。

「退屈だね」

僕は睫毛に止まった羽虫を払う。

「次はどこに行く？」

シルベットがその細い指を突き出した。空を刺すように。

「天国」

「まだ死にたくないよ」

「でも、生きてたくもないわ」

彼女の囁くような声が、僕の中の触れちゃいけない部分を鋭く突き刺した。なるべく考えないでいたことが、心を通さずに口からでていく。



「――神様が僕らを受け入れてくれると思う？」

シルベットは首を振った。ゆっくりと。

「悪いことをしなくても汚れている人間はたくさんいるのにね」

世界は歪な天秤でできていて、どちらかがいつも重くなっていないといけない。

優位なものは下を覗きこんで慈悲深い言葉を投げかけ、劣位の人間はそれを睨みあげて唾を吐きかける。どうせ自分の顔に落ちてくるのだけど。そうするとどこかから下品な笑い声が聞こえる。誰が笑ってるのかみんな知ってるくせに、知らない振りしてる。

僕はそのシーソーゲームから降りて、支柱辺りでそれを眺めてた。世の中のどんな決まりも、仕組みも、僕には関係ない。僕のやってきたことがいつかそのルールの中に僕を押し込めようとするかもしれないけど、それはそれでいいだろう。

「ねえ、知ってた？」

モスグリーンの瞳が僕には見えない何かを見つめてた。夜の気配を含んだ水色の風の中に。

「何を」

「心がいつもからっぽだってこと」

そういったシルベットの悲しそうな横顔、今でも忘れてない。

シルベットは人の世に這い上がってきた悪魔なんだ。だって、彼女はとっても綺麗だったけど、醜いものが嫌いな天使ならきっと簡単に絶望して死んでしまう。汚れがないことは、汚されやすいことと同じだから。

アテのない旅がどこまで続くかなんて誰も知らない。どこにたどり着くのかも。いまどこにいるのかだって関係ない。手を伸ばせばお互いの近くにいる、それだけでいいような気がしてた。いつも憶えている違和感を、シルベットと一緒にならどこかにやってしまえる。そんな風にさえ思えた。

でも本当は知り尽くしてしまっている。居場所なんて世界中探したってどこにもないことを。望みもしなかったのに与えられた役割を担い、日々をやり過ごすように生きていかななくてはならないのだ、僕も、彼女も。

ある朝、窓辺の彼女は泣いていた。

「夢って残酷ね。見れば見るほど現実が空しくなるんだもの」

抱きしめたらシーツがするりと抜ける。明けきらない空の薄い光に照らされてる、彼女の猫みたいに柔らかな身体のライン。僕のぎこちない仕草が映画のロマンチックなシーンを真似たように思えたのか、シルベットは少しだけ笑った。滑らかな赤毛が揺れる。甘酸っぱい香りが零れた。

愛してる、といおうとしたけれど、少し躊躇ってから諦めた。僕の心からそんなものが生まれ

てくるなんて思えなかったから。きっとこの空気に酔ってるだけ。

「泣かないで」

そうだ。この瞬間に触れ合っていて感じている体温以上に、意味のあるものなんてありはしない。その他はすべて果敢無い偽物。

「ねえ」

シルベットは毒婦みたいに笑う。涙を溜めた目はどこまでも澄んでいて、嘘のない色をしてた。

「私にくれる？ あなたのすべて」

「いいよ、別に」

僕のすべて――それって何か、わからなかったけど。

「私を眠らせて。――永遠に」

それがシルベットから聴いた最後の言葉。

僕はひとりでモーターを抜けた。薄闇の中を水色の車は走る。シルベットと一緒にだった、あの丘を目指して。

新しい光の下で、不自然に一輪のヒマワリが倒れてた。そのそばに降り立った茶色の小鳥がミミズをついばむ。掘り起こされた土の柔さの意味など知りもせずに。世界は何も変わらない。何も。哀れな娼婦が一人、いなくなったくらいで。

スコップを放り出し、僕は地面に寝転がる。草いきれと土の香りの中に、微かに残るチェリーパイの匂い。

生ぬるい雫が頬を流れたのは、風がただ、目に染みただから。

砂地と緑の同じようで違う景色が後ろへ流れていく。時間を押し流すように。車体は不規則なリズムを刻んで緩い倦怠感を誘う。

何の考えもなしに飛び乗った列車、向かいの席で大富豪がプールで自殺したって話をしている。世界中の酒を飲み尽くしても有り余る金、毎日取り替えたって何十年かかる女たち、すれ違えば振り向かれるほどの名声、世の中を掌で転がせる権力。それで人生が空しいって、何があれば人は幸せになれるんだろう。

シアワセはきっと、目の痛くなるような黄色の海だ。

ヒマワリは眩暈を起こすくらい太陽をみつめて、そして萎れてしまう。人間はそれで満足できずに太陽を掴みにいってしまう。焦がされてしまうだけなのに。もしかしたら本当に欲しいものは焦がれるだけ焦がれて、手にはしないほうがいいのかもかもしれない。

「どうして、あたしを助けたの？」

隣に座った彼女が思い出したように話し掛けてきた。僕は曖昧に笑ってみせる。

「さあ」

「何にも話してくれないのね」

「過去のない男だから、僕は……」

「変な人」

本当は、わかってた。

ナイフを握り締めた痛みの中に彼女が知った後悔は、あの日の風と同じ匂いをしていただろう。それだけだ。僕を突き動かすのに強い衝動はいらない。

「どうするの、これから」

「考えてないわ。ねえ、どこかの田舎にでも行こうかしら。牛の世話とかして……」

だけどこの列車はそこまでは連れて行ってはくれなかった。ホームに降り立った僕たちを警察官たちが取り囲んだから。僕は咄嗟に駆け出していた。彼女の手を握り締めて。

どうして走り出したかなんて僕にもわからない。自分の気持ちに正直になったら自分が見えなくなるんだ。頭の中が掻き濫されるような、心が壊れていくような。

ああ。僕は本当にイカれている。

戸惑いながら走る彼女の髪が熟れすぎたストロベリーみたいな赤色で、やせっぽちの女の子に見えるから。

ぶ厚い雲の向こうから雪がふわふわと舞い降り始めた時、彼女の足がぴたりと止まった。

「逃げたってムダよ」

色あせた壁、娼婦の香水と男の欲望の気配、鬱屈だけが漂っている。死んだように。朝日を浴びれば夢と消える街。壁に咲く妖しい色をたたえた花は、無気力な骨格だけを晒して僕らを見下ろしていた。心地良いような胸が悪いような場所。

「どうして？」

「だって、アタシ、人を殺したのよ？」

「だから何なの」

人殺しがキレイなことだとは思わないけど、人の作ったルールに降伏することがなんになるだろう。人間が殺しを罪だと決めたのは自分が殺されるのが怖いからなのに。それでも、彼らの前で僕らは悲しい眼をしてはいけない。悪いヤツなんだから。そんなことわかってる――、けど。

僕は人差し指で、雪空を突き刺した。いつかあの娘がやったみたいに。

「こうしないか。生きたいように生きた人間が天国にいけるんだ。やりたいことはやっておかなかちゃ。明日世界が終わっても構わないくらいにさ」

彼女の頬に落ちた雪が溶けていく。涙みたいに張り付いてた。雫になってするりと落ちる。こんな風に入だって気持ちだって、いつの日か全部どこかへ流れていってしまうんだ。自分じゃない誰かの元へ。

「アンタって、とっても純粋な人ね」

彼女がふっ、と笑った。諦めたみたいに。

「それってすこぶるダメってことじゃん」

「でも、そういう人嫌いじゃないわ」

「好きでもないけど？」

「ねえ。あの時アンタ、アタシに訊いたよわね。どうして殺したんだって」

深く沈んだヘーゼルアイが、僕の眼を覗き込んだ。静かに。

「あの人のこと好きだったから」

彼女の両目が澄んでいるのは迷いがないからだ。知ってるんだ、もう逃げ続ける理由なんかないことを。

「それ以上の理由なんて、どこにもないの。きっとね」

彼女は僕に背を向けた。華奢な背中に掛かった髪が束になってユラリと揺れる。

女の人なんて放っておいたって、どこかで巧い具合に何かに寄りかかって生きていくんだろう。塀から飛び降りた猫が予定調和で着地するみたいに。壊れそうなくせにしなやかだから。

太陽を見つめて眩暈を起こしそうだったのは僕だ。どんな眼をしているんだろう、あの日の幻から逃げ続けている僕は。

集団墓地の静けさ、草の匂い、エンジンの鼓動、カラスの羽ばたき、外れてるヘッドライトの枠、折れそうな足首、ヒマワリの黄色、紫の花、香水草、チェリーの砂糖漬け、駆けていくのは藍色のシャツを着た僕、いたいけな少女—シルベット。君はいまも醒めない夢をみてるの？

悲しみが嫌だからグレたふりをしてきたけど、僕は少し変だったのかもしれない。いま僕の右手が触れているのは、あの娘の手じゃないってことがこんなに心許ないから。

懐に隠したピストルに手を掛けた。命ってやつも案外、こんな風に掌に収まる重さなんだろう。こんなチンケな道具でいつだって簡単に死ぬるのに、人間はいつも“必死”で生きてる。

そっとこめかみに宛ててみる。不気味に硬い感触。

神様は僕たちを愛しちゃくれないけど、やっとその意味がわかった気がする。でもそのことについて考えたくなんかない。これっぽっちも。

僕の気持ちが変わることなんてもうありえない。たとえいますぐ奇跡がおきて、世界中が幸せに満ち溢れても。どうせ僕は生きてはいけない。そんな世界、退屈すぎるから。

「ケリーっていの、アタシ。アンタは？」

振り向いた彼女の唇が小さく震えた。僕は少し笑って、ピストルをこめかみから外す。

「冗談だよ」

掌の中でピストルをくるりと回してみた。口元の微笑がゆっくりと苦笑いに変わるのを感じてる。

絶対、なんてそんな決意すら数秒後に揺らいでる。臆病風に吹かれて。誇り高く生きてなんていけない、いつだって無様にぬくもりを求めている。それが僕なんだ。

シルベットを指差して笑ってたあいつらの気持ちがいまならよくわかる。嫌われるのが怖いからあらかじめ全てを嫌っておくんだ。そうすれば怖いものは寄って来ないから。中途半端なアルコールは酩酊させてくれない。絶望だってそうだ。何も無い、そう思うことで心を満たしてる。

だってそうしなくちゃ、生きてられない。

何が怖いって、自分がひとりぼっちだってことに気付くことだ。生まれてから、死ぬまで、ずうっと。それが怖くて僕は走り続けてた、きっと。

「ロメオっていうんだ」

僕はピストルから弾を抜いた。投げ捨てる。できるだけ遠くへ。パラパラと乾いた音が石畳に散った。こいつが恋しくなったらそこが僕の終わりだ。

「ねえ、ケリー。君の事、愛してるよ」

僕はジョークになるくらいマジな顔を作った。自分でも冗談なのか本気なのか、よくわからなかったけれど。彼女はこらえきれないで嘔き出した。

「アンタって、ほんとにただのナンパ師だったのね」

「もしかして、天使だと思ってた？」

「まさか」

僕らは声をあげて笑った。手を差し出したのはどっちだったろう、そんなことはもうどうでもいい。僕は彼女の手を握り締める。ぎゅっと。

僕たちに明日なんかないってこと、逃げ出したあの時からわかってた。だけどいまは笑い続けていられるような気がしてる。迫りくるサイレンの音に、この声が掻き消されても。

人の肌を憶えてしまったら、手放すことなんてもうできやしないんだ。求め合うことに難しいことなんて何も要らない。僕がいて、彼女がいる、それだけでいい。

心はいつも、からっぽだから。

完